稲毛の成り立ち－太古より海と共にあった稲毛－

今回は、稲毛のムラの成り立ちと、現在の稲毛区に至るまでの歴史をご紹介します。

低地を水田に

今から約6000年前、縄文時代前期には、園生や、小中台、宮野木など、現在貝塚がある地域の手前あたりまで海が深く入り込んでいたと考えられています。縄文時代後期には、土地の隆起と海水面の低下によって、低地が陸地となり、弥生時代には水田として利用され、人々が住むようになったようです。

浅間神社と富士山信仰

浅間神社は大同3年(808)、現在の小中台地区に建てられ、その後信仰の対象である富士山を望む現在の場所に再建されました。富士山は主に海に漁に出る人が方角や天候を知るための目印となることから、江戸時代には辺り一帯の人々から広く信仰されていたようです。

①かつての稲毛海岸から見える富士（大正７～昭和８年頃）

「稲毛」の語源は諸説あり

「稲毛」という地名の起こりはが現在のところ明らかになっていません。古代の官僚「稲置」に由来する説や、稲穂を積み上げ築いた城や稲束を貯蔵する小屋を意味する「稲城」に由来する説、他にも諸説ありますが、いずれも証拠となる資料は見つかっていません。

江戸時代になると、稲毛は徳川幕府直轄の領地と、旗本である朝倉氏と石河氏という2人の領地、さらに浅間神社の領地が入り乱れ管理されます。ひとつの村に複数の領主がいることは、管理が大変なように感じられますが、当時の関東では珍しいことではなかったそうです。

村（ムラ）とは？

村は、基本的に家を構成単位としています。同族や地縁に基づいた共同体で、地域の鎮守や氏神を祀ったり、若者組や婦人会、講集団などを組織し、活動を担いました。村の中にさらに生活（町内会）単位での「ムラ」があり、漁業や林業など、隣接する村（ムラ）と連合して物事を処理しました。「講」とは神仏等の信者の集まりのこと。稲毛でも富士講や出羽三山講、子安講（十九夜講）、えびす講、三峰講など、かつてはたくさんの講が行われていたそうです。

②稲毛２丁目に現存する如意輪観音の十九夜塔

東洋のハワイ、稲毛

古くより農業と漁業を営み生活をしていた稲毛ですが、明治21年（1888）に県内初の海水浴場が開かれると翌年には健康増進を目的とした海気療養所（後の海気館）も開設され、保養地として知られ始めます。さらに明治32年（1899）に総武鉄道、大正10年（1921）に京成電鉄が開通すると、海水浴や潮干狩りに訪れる客が増え、稲毛には多くの旅館や別荘が建てられました。特に有名だった海気館には森鴎外や林芙美子、島崎藤村や田山花袋など多くの文人墨客が訪れ、稲毛は東洋のハワイとも呼ばれたのだとか。

③海気館は和洋折衷の２階建てで、離れもありました。（大正７～昭和８年頃）

度重なる合併

また同族や地縁によるムラの生活は、明治21年（1888）、政府による市制町村制の施行に伴う町村合併により変化していきます。教育や徴税、土木や戸籍といった行政上の目的と、自治体の規模の隔たりをなくす為、全国的に合併が行われました。稲毛村は明治22年（1889）に検見川村（後の検見川町）に合併、昭和12年（1937）に検見川町が千葉市に編入し千葉市稲毛村となります。さらに平成4年（1992）千葉市の政令指定都市移行に伴い旧千葉郡都賀村、旧検見川町、旧犢橋村を区域に含み、稲毛区が設置されました。度重なる合併を経て、現在の地方公共団体へと変貌を遂げたのです。

埋立による変化

自治体の変化とあわせて、高度経済成長期には、稲毛の海辺にも変化が訪れます。千葉県では1950年代より産業の工業化が進められ、東京湾沿岸の埋立が行われました。稲毛では昭和36年（1961）からと、42年（1967）からの2度にわたり埋立が進み、かつての海岸線は2.7km先に移動しました。埋立地には、多くの住宅やレジャー施設が建てられ、都心へのアクセスも良いことから、全国から若い家族が移り住み、新しい街へと変貌していきました。左の写真は海洋公民館こじま。海防艦として造られた船を海を学べる公民館として改装し昭和41年（1966）に開館。当初は第1期埋立後の海岸に浮かんでいましたが、その後も埋立が進んだことで陸の中に取り残されたように建つユニークな施設となりました。平成5年（1993）には耐震等の理由により取り壊されましたが、長年にわたり地域の人々に愛された施設でした。

④開館当初、海に浮かぶ海洋公民館こじま。手前では海洋少年団がカッターボート漕ぎの練習中。

⑤第二期埋立後のこじま。周囲を埋め立てられ、街の中に浮かぶことに。

あなたはいくつ知っていますか？ 稲毛年表

原始時代	園生、小中台、宮野木に貝塚（海の入り江だった）
大同３年	浅間神社鎮座（小中台）
文治３年	浅間神社社殿再建（現在の場所）
江戸時代	幕府領、旗本領、神社領が入り混じる
明治19年	寒川監獄の囚人によって千葉街道が整備される
明治21年	千葉県初の海水浴場が稲毛に開かれる
明治22年	稲毛海気療養所開設（後の海気館）
	市制町村制施行により、検見川村（稲毛）、千葉町、都賀村、犢橋村などの自治体が成立（明治の大合併）
明治32年	総武鉄道　稲毛駅開業
明治42年	千手寺と南蔵院が合併し千蔵院に
明治45年	奈良原三次らが稲毛海岸に民間飛行場を開設
大正３年	ゆかりの家竣工（水飴商・鈴木氏の住まいとして）
大正７年	神谷傳兵衛が稲毛海岸に別荘を建てる
大正10年	京成電鉄　京成稲毛駅開業
	千葉町が市制施行→千葉市となる
昭和12年	検見川町（稲毛村）、蘇我町、都賀村、都村が千葉市に合併
	愛新覚羅溥傑と嵯峨浩の新婚生活、ゆかりの家に住む
昭和36年	稲毛海岸 第１期埋立の開始
昭和40年	元日本勧業銀行、千葉トヨペットとして稲毛海岸に移築
	千葉市 海洋公民館 こじま オープン
昭和42年	稲毛海岸 第２期埋立の開始
昭和51年	いなげの浜（人工海浜）オープン
平成４年	千葉市が政令指定都市に移行、６区が発足。
	旧都賀村、旧千葉市、旧犢橋村、旧検見川町、各村の一部の地域が合併し、現在の稲毛区となる。

●本号は、西川明氏（元千葉市史編纂委員）と菅谷祐輔氏（千葉経済大学地域経済博物館学芸員）を迎え開催した「いなげお話し会 part14」の内容をもとに編集しました。●画像は①③千葉市立郷土博物館 加藤博仁氏絵葉書コレクション④西川明氏⑤彦坂徹氏（文化遺産こじまを保存する会）よりご提供いただきました。皆様ご協力ありがとうございました。

海気通信

１７号

2023/10/24
発行

千葉市民ギャラリー・いなげ

〒263-0034
千葉市稲毛区
稲毛 1-8-35

TEL:043-248-8723
FAX:043-242-0729

https://galleryinage.jp/

⇐ 海気通信バックナンバー